

東冬の兩韻を論ず

大島正健

今の漢詩の作家に就きて、東冬兩韻の性質の別を問ふに、殆ど明答を與ふる者あるを聽かず。唐韻廣韻集韻を始として、南宋の平水韻に至るまで、皆其別あり。元の韻會に尙此別あるは、或は平水韻に則りたるものなるべし。明の洪武正韻は、東冬を合して東の一韻に作る。是れ其時代音に由りたること明かなり。清に至りて又冬を復活せしめたるは、時代音を取らずして、歴史音に由るたるべきこと疑なし。

周秦時代の古韻に關しては、顧炎武、江永、段玉裁及び其他の學者、後の東冬及び其上聲去聲に江及び其上聲去聲を合はせて一部に收むる者多かりしが、孔廣森は之を二部に分ちて、其一を牟、降、宮、躬、中、蟲、農、彤、冬、終、戎、宋、宗、蒿、衆、融、隆の類、其二を公、工、孔、共、凶、東、同、通、童、重、冢、充、叢、送、函、春、松、從、邕、雍、勇、容、甬、用、丰、封、豐、虜、蒙、冗、弄、龍の類と爲せり。此意見は能く事實に適合す。是は試に支那古韻史上に待筆すべき價值ある、大發見なりと謂ふことを得べし。元來兩類其聲近かりしが、故、古代より混用の例多きは免れ難く、分けて漢人の押韻法に屢其例を見るは、此時代の慣用として韻の緩きに基したることなるべ

し、されど魏晉の頃に至りても、尙遙かに先秦時代の音脈を引き、兩類の別概して儼然たるを見るなり。

曹植雜詩

轉蓬離本根、飄々隨長風、何意廻颺舉、吹我入雲中、

下、窮、戎、充と押す。風、充は他より入る。

阮籍、詠懷詩

王業須良輔、建功俟英雄、元凱庸哉美、多士頌聲隆、

下、融、冲、戎、崇、終、風と押す。雄は他より入る。

潘岳、楊荊州誄

魏氏順天、聖皇受終、烈々楊侯、實統禁戎、

下、宮、風、崇と押す。

束皙、補亡詩

颯々重雲、習々和風、黍華陵巔、麥秀丘中、靡田不播、九穀斯豐、

豐は他より入る。

陶潛、和戴主簿詩

東冬の兩韻を論ず

虛舟縱逸掉、回復遂無窮。發歲始俯仰、星紀奄將中。

下。豐。風。終。忡。隆。蒿。と押す。

右は第一類の押韻を證す。

曹植、王仲宣誄

會遭陽九、炎光中曠。世祖發亂、爰建時雍。

下。鍾。恭。龍。邦。空。從。通。と押す。

王粲、贈蔡子篤詩

翼々飛鸞、載飛載東。我友云徂、言戾舊邦。

下。江。通。同。と押す。

潘岳、射雉賦

或乃崇墳夷靡、農不易墮。梯菽叢糗、翳蒼蒼其。

下。冢。動。踊。悚。踵。項。と押す。

郭璞、江賦

樛杞稊薄於潯溪、楫楫森嶺而羅。峯桃枝篋、篔簹實繁有叢。

下。紅。茸。江。松。龍。空。東。と押す。

孫綽遊天台山賦

既克躋於九折路威夷而脩通。恣心目之寥明任緩步之從容。

下、松、嶺、胸、蒙、蹤と押す。

右は第二類の押韻を證す。

晋以降は時の進むに従ひて、兩類の往來次第に頻繁と爲り行けり。されど晋の時代に在りては、此の如き押韻は、兩類獨用の押韻に比すれば、其例を見ること少數なり。兩類混用の常例と爲りたるは劉宋以後の事なりとす。

陸雲大將軍宴會被命作詩

祁々臣僚有來雍々薄言載考承顏下風。

下、容、豐、崇と押す。

左思魏都賦

筭祀有紀天祿有終傳業禪祚高謝萬邦。

下、冲、公、庸、繩、蹤、熊、隆、同、風と押す。繩は他の部に屬す。

劉宋以降兩類混用の中より、次第に現時の如き東冬(平、上、去、入)の韻を組成するに至れるなり。

東冬の兩韻を論ず

謝靈運田南樹園激流植援詩

樵隱俱在山由來事不同不同非一事養痾亦園中

下風江塙窓峯功蹤同と押す同中風功は東塙峯蹤は鍾(唐韻)江窓は江

袁淑傲古詩

諄此倦遊士本家自遼東昔隸李將軍十載事西戎

下中風宮空蓬と押す東獨用

北齊南郊樂歌

上下眷旁午從爵以質獻以恭威斯暢樂惟雍孝敬闡臨萬邦

從恭雍は鍾邦は江江未だ分離せず

隋太廟歌

孝熙嚴祖師象敬宋惟皇肅事有來誰々

下重恭容從と押す宋は冬他は鍾冬鍾同用平水韻鍾を冬に合はす

韻鏡にては各轉の平上去入を各又一二三四の四等に分つ今第一轉の東(平上去入)の韻を見るに其一等に配せられたるは第二類所屬の者二等以下に配せられたるは第一類所屬の者なるを定則とし第二轉の冬(平上去入)の韻を見るに其一等に配せられ

たるは、第一類所屬の者、二等以下に配せられたる者は、第二類所屬の者なるを定則とす。右兩轉の各一等韻の、先秦時代の古韻に比し、其位置の轉換したるは、奇なる關係なりと謂ふべし。左に聊かこれが解釋を試むべし。

東冬の韻は、其韻尾にngの音を有する有尾韻なり。東冬より分れ出たる、第三轉の江の韻も亦然り。先秦の古韻にては、有尾韻は、常に之に對次する無尾韻を有せり。後世の東冬江に屬する者に對次する無尾韻は、後世の蕭肴豪尤と侯(唐韻)との二部なり。上聲去聲は均しく之に準ず。入聲は元來無尾韻の性質なりしも、六朝の中期に至りて、有尾韻の方に移りたるものゝ如し。蕭肴豪尤の諸韻、分裂するに隨ひ、蕭肴豪の入聲は、藥陌錫に入りたる者を除きては、主として沃覺に移り、屋に入りたる者は少數にして、寧ろ之を例外と見ること可なり。沃は第二轉の入聲の一等韻、覺は第三轉の入聲の二等韻なれど、當初は沃と覺の大部と、一韻なりしこと、齊梁の詩歌尙能く之を證す。蕭肴豪の其聲を變ずると同時に、覺も亦其聲を變じて、沃より分れ出でたるなり。尤の入聲は、他と異なりて、第一轉の二等以下の入聲の韻と爲るを正則とす。

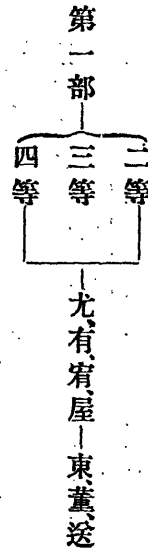
侯(平、上、去)の大部分は虞(平、上、去)に移り、殘部は尤(平、上、去)と同用と爲りて、韻鏡の第三十七轉を組成せり。侯厚候は一等韻にして、尤有宥は二等以下の韻なり。侯の入聲は屋に

入るを正則とし、其の中の少數の者は轉じて覺に移れり。侯の入聲の韻は、屋の一等韻にして、その二等以下の韻に通せず。侯の平、上、去の三聲は、虞の平、上、去の三聲に移りたる者多しと雖も、其入聲は、獨立して二等以下の韻として存在し、韻鏡第二轉の入聲の、二等以下の韻を組成せり。是れ唐韻の燭の韻なり。先秦時代の古韻にては、屋燭同韻なりしに、隋唐の韻にては、沃燭同用と爲り、又侯の入聲を一等韻、尤の入聲を二等以下の韻として、屋の中に双方を包含せしめたるも、各韻本來の性質より考ふれば、不審と言はざるを得ず。

されど右の如きは、入聲の既に、有尾韻に移りてより後の分類なれば、之に對する平、上、去の有尾韻と、自ら同様の疑問に陥るべし。故に無尾韻のみを取りて考ふるに、第三十七轉の一等韻侯、厚、候と、二等以下の韻尤、宥と、同用と爲りたること、抑も先秦時代に兩者其部を異にしたる者の、混用の始なりとす。之を詩歌の作例に徵するに、魏晉の頃より、侯より尤に通ふ者次第に頻繁と爲り來り、六朝の中期に至りては、兩者全く一韻の如く押したる例多し。これ兩部の韻、其聲の相接近し居りたるを察するに足るべし。魏晉以前と、六朝隋唐の頃とは、其聲に差異を生じたること、其證迹明かなり。今入聲を無尾韻の方に置き、假りに第一部、第二部の名稱の下に分類を立て、無尾韻と

有尾韻とを比較するときは、其對照の秩序の、整然たる者あるを見るなり。後世屋よ覺に入り、東董、送より江、講、絳に移りたる者は、還原して之を考ふべし。

無尾韻 有尾韻



第二部——一等 侯、厚、候、屋——東、董、送

是に由つて考ふれば、侯、厚、候と尤、宥と、同用と爲りしに基き、一等の屋の、侯、厚、候の入聲なりしと同じく、二等以下の屋は、尤、宥の入聲なりしものと知るべし。同様にして有尾韻一等の東、董、送の無尾韻の侯、厚、候と對次するが如く、二等以下の東、董、送も、亦無尾韻の尤、宥と對次する者と、推斷せざるを得ず。故に古韻にては尾音を取捨して、此兩者相往來したる例あるを見るなり。宋齊の時代に至りて、屋は無尾韻の方より、有尾韻の方に移りたる證迹あるは、既に説きたるが如し。韻鏡の第一轉と、第三十七轉とは、尾音の差異あるのみにて、其性質全く相同じきを知るべし。

冬、○、宋と鍾、腫、用（唐韻）とに對する、無尾韻の方を探るに、第一、第二兩部所屬の者を配

東冬の兩韻を論ず

置する、一等と二等以下との關係につき、平、上、去の三聲は其用法の別、明かならざるが如し、只入聲の沃と燭とは、能く之に對する位を保つ。後覺に移りたる者は、之を還原して沃の中に收め置くべし。沃燭同用の例には、往々接することあれど、有尾韻の方、兩部同用の例は至つて乏しくして、押韻の上より、満足なる證を擧げ難きを遺憾とす。

無尾韻 有尾韻

第一部 一等 沃 冬、〇、宋

第二部

三等	燭	鍾、腫、用
四等		

沃燭の有尾韻の方に移れるは、屋の場合に同じ。無尾韻の方、第一部の沃は蕭肴豪の方の入聲なり、故に沃と同系の告、焔、毒、篤、襍、瑄、灤の類、此中に見ゆ、覺と同系の學、叱、摧、較、樂、卓、瀼、稍、駭、駭、邈、擗、電、孽の類は、本沃と同韻に屬せし者なり、之に對次する有尾韻の方、冬、宋と同系の者に、碯、彤、農、宗、乘、磐の類あり、又本、同韻に屬せし者にして、降、嘯、滌、滌、腴の類ありしが、今江、講、絳の韻に入る、第二部の無尾韻の燭と、有尾韻の鍾、腫、用との對次は、特に之を説明する要無かるべし。

さて兩部の有尾韻を検するに、南北朝の頃に至りて、双方相混じ、其押韻雜然たる者多

かりしが、其間に東冬の韻次第に固定し來れるを見るは既に述べたるが如し。今その平、上去の三聲に入聲を添へ、東董、送、屋と、冬、○、宋、沃と、その一等韻を交換し、而して入聲を無尾韻の方に戻せば、概して孔廣森が定めたる古韻の分類と同様と爲る。是れ遙かに先秦時代の音脈の通ひ居りたるを知るに足るべし。無尾韻に於いて、第二部の一等韻の、第一部の二等以下の韻に、同用と爲りしより、之に對次する有尾韻も、亦同傾向取り、第二部の一等韻と、第一部の二等以下の韻と相通ひ、遂に四等相合し、隋の陸法言の分類にては、平、上、去三聲の一等韻に、夫々名稱を附して東董、送と呼び、之に伴ふ入聲を、屋と唱へたるなり。其變化を受けてより、第一部の一等韻は、第二部の方に移り、その二等以下の韻と、同用と爲り、平、上、去の三聲に入聲を加へて、冬、鍾、○、腫、宋、用、沃、燭と命名を施せり。

無尾韻の方にて、侯の尤に通ひたるは、侯の韻オ(○)よりウ(u)に近づき、恐らくは其中間の聲にてありたるなるべし。我、吳音にては、之をウと書するを例とす。之に對次する有尾韻の方の、東の一等韻は、隨つてオウ(ong)よりウウ(uug)に近づき、其中間の聲にてありたるに似たり。我、吳音にては、之をも亦ウと書するを例とす。二等以下の有尾韻は、我常呼の聲にング(ng)の添はりたるものと見て可なるべし。入聲には、四等を通じて、母

音にク(k)の尾音を附することゝす。無尾韻の尤、宥、及び其入聲の韻に對次する、二等以下の有尾韻に、別韻を設けずして、一等韻の東、董、送、屋の名稱の下に、之を併置せしめたるは一、二、三、四の四等韻共に能く融化したるに由る所なるべし。

冬の韻はわが常呼の漢音の如く、オウ(ong)の聲を見ること可なるべし。二等以下の韻も、只其響に力の差異あるのみにて、共に同聲と見做すべし。我が吳音にて皆均しくウ(ue)の假名を附するを例とせるは、是れ東冬混用の時代の聲を示せるに似たり。入聲は母音の下にク(k)を附するに止まる。唐韻にて一等韻の冬、○、宋、沃と、二等以下の韻の鍾、腫、用、燭と、區別を立てたるは、兩者稍融化を缺く所ありたるに由るべし。平水韻にては、二等以下の諸韻の名稱を廢止す。冬の方は東の方に比すれば、稍合口音に傾きたる所ありたるものと見え、韻鏡にて第一轉を開、第二轉を合に作り、後世之を解釋するに當り、兩轉の開合の別、久しく疑問の種と爲り來る。この開合の別に關する愚見は、國學院雜誌第二十三卷第四號に掲載したれば、略して再論せず。